

福岡市大字周船寺

丸隈山古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第10集



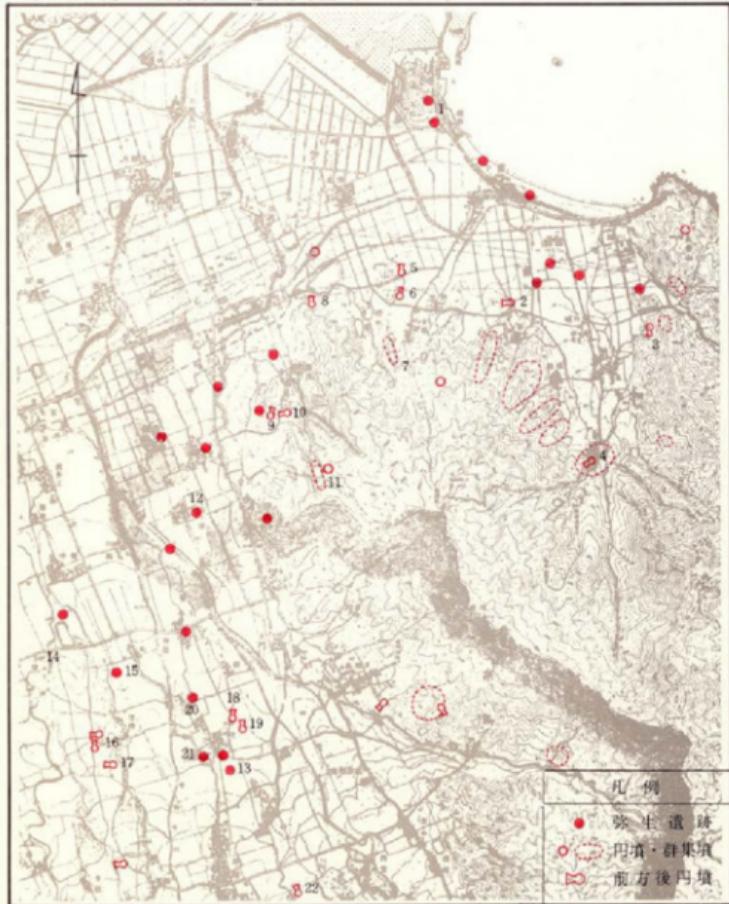
1970年

福岡市教育委員会



文化課
藏

第1図 丸隈山古墳周辺の遺跡分布図 (1:50,000)



遺跡地名

1. 今山遺跡
2. 今宿大塚古墳
3. 銀崎古墳
4. 本村古墳群第5号墳
5. 宮崎安貞碑古墳
6. 八幡神社古墳
7. 徳永古墳群
8. 丸隈山古墳
9. 飯氏第1古墳群2号墳
10. * * 1号墳
11. 飯氏第II古墳群
12. 宇田川原箱式石棺
13. 井原遺跡
14. 平原遺跡
15. 石崎遺跡
16. 先山古墳
17. ゼニガメ塚
18. 端山古墳
19. 梁山古墳
20. 三雲田端遺跡
21. 三雲遺跡（推定地）
22. 二塚

まえがき

丸隈山古墳は原初的横穴式石室として、我国の大陵文化との連関や古墳の変遷を究明していく上ですこぶる重要な遺跡であることは古くから関係者方面に熟知された遺跡でありながら、いまだ正式な報告書が作製されていませんでした。このたび、関係者方面的協力を得て、報告書作製のはこびになりました。本報告書が福岡市の文化財の一層の理解と文化財保護のために役立てば、望外の喜びです。

なお本報告書作製に協力をいただいた、関係各氏に厚く御礼申し上げます。

目次

1. 丸隈山古墳の歴史	1
△2. 墳形について	2
3. 石室と石棺	4
4. 出土遺物	8
5. 出土頭骨片について	11
6. おわりに	11
丸隈山古墳関係参考文献目録	13

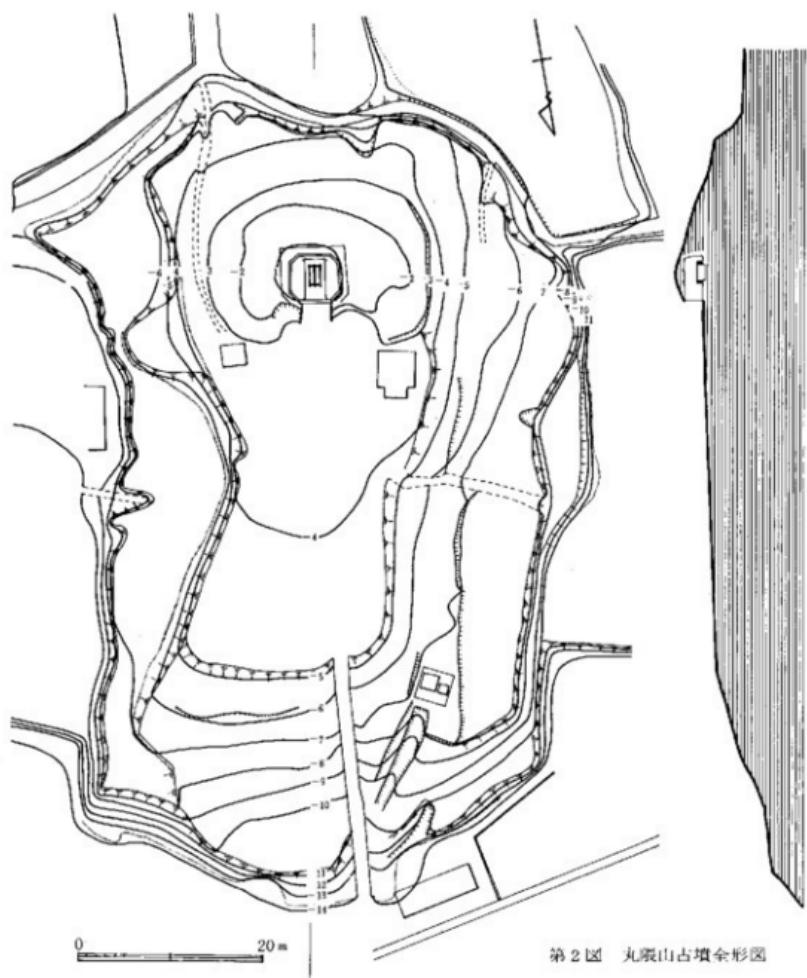
1 丸隈山古墳の歴史

はるか背振山地より発した支脈群は、北方の博多湾沿岸において、そのふところにいくつのかの海岸平野を形成する。こうした海岸平野である早良平野と糸島平野を東西に区分する一 支脈の先端附近に標高 416m の高祖山が聳え、丸隈山古墳はこの高祖山の北麓底平丘陵の最先端、標高23m の洪積台地上に、主軸をほぼ南北に向けて、北側沖積平野に面して位置している。国鉄筑肥線周船寺駅の東北0.65km、国道 202号線のや、南で福岡市大字周船寺字ウエノ 252 の 2 番地に所在する。今は行政区上福岡市の西端に位置するが、かつて旧糸島郡周船寺村に属していたように、歴史地理上糸島平野の東端にあって、東側早良平野とのルートを押さえるような地点に位置する。西側に糸島平野の水田地帯、北に博多湾や糸島水道を眺望し、律令の時代、遺跡の具体的な所在地は不明であるが主船司の名が残るように、海陸の要衝地帯に築かれた古墳である。

丸隈山古墳の発掘山米については、妙正寺丸隈氏所蔵の古記録と貞原益軒の筑前国統風土記に詳しいが、両者の記録には部分的に若干の差があるので、前者を①、後者を②として以下、今日までの丸隈山古墳の歴史を辿ってみる。

①によれば寛永16年4月12日（1639年）—②によれば寛永6年4月11日（1629年）—周船寺村民新藏が夢の中で観音より丸隈山に籠っているので堀り出すべくお告げを受け、その後二回、計三回の督促を受けて、同年8月21日より堀り始め同27日に口を開いた。石室の法量は「長式間横七尺高さ窓間但口は北向にて御座候」①と現状よりや、小さく、具体相は、不明だが、石室入口が北に開口するように書かれている。②には「上は大石をおひ、口も亦石を以って是をふさぐ」と横穴式石室構造を暗示しているようにもみえる。「石の横長七尺横五尺其内に中隔て御座候。内ちに者シャレかうべ1つ御座候」①とあるが②には「觸鑑両方に2あり」1は破碎したが、他の1つは大なる觸鑑で今猶存せりとあるが、これは現存の頭蓋骨片をさすのであろう。②には石棺内に石枕ありとしているが現存しない。刀矢の根は、くさって形ばかり残っている。「鏡大小三面御座候」①とあって、②には「大なるは八寸、中なるは五寸五歩、小なるは五寸許あり」とあって本来三面あったが、残存の鏡は、六鏡鏡は7寸5分で、二神二獸鏡は5寸7分であるから大・中の二面に相当し、小の5寸の鏡は、現在全く所在がわからない。その後仮屋をかけて観音を祭ったが、「慶安2年5月（1649年）太守公忠之様より三間四面之御堂」①を繪ったが「寛文年中（1661~1673）、頽破して今はなし」②。その後、いつの時代かに再建された。保存会の話によれば明治30年~40年頃石室内に建てられていた御堂修復の際に棺内より勾玉1が出土し、さらに大正初めごろ石室内前方での祭り事の際もう1つの勾玉1が出土し、これが現存している2個の勾玉である。その後御堂は大正15年に朽ちて、昭和2年御堂は石室外の前方部西南に移築され、石室は復元補修された。石室の補修は奥壁全面とそれにかかる天井石および側壁の一部を除く全てにわたるもので、セメントによって固められ、現墳頂部盛土の大半はその時の補修による。昭和3年国指定。なお明治末年頃までは、前方部は現在より1m程高いレベルにあつたとのことである。現在管玉は7個、小玉は71個残っているが、昭和40年前後までは石室入口のすぐ前方部に雨後洗われた玉類が発見され、总数50~60個にものぼったとのことであるが、個人の所有に帰し所在は不明である。石室内から排水に混じっていたものであろう。

主なる遺物は周船寺妙正寺に、玉類は同保存会によって保管されている。



第2図 丸殿山古墳全形図

2 墓形について（第2図）

本墳は、主峰高祖山（416m）から、北方（海側）に派出した低平な、小丘陵上に後円部を北にはば南北に立地するが、主軸は約10度北より東にずれる。開口（寛永6年1629年）が古くかつ信仰の対象となっていたこともあるって、墳丘に対する変改はかなり激しい（参文2）。

その顯著なものだけでも、後円部頂における石室復原工事による盛土、前方部の公園化、同構の右段などが、そうである。

つぎに、得られた墳形実測図（第2図、200分の1）によって、各部を観察すると、あまり完好とはいえない後円丘は、等高線1-6mがほぼ球状にまわるが、7mは採上流失のためにかなり流れ、特に東側が激しい。墳頂部はかなり平坦であるが、本来そうであったのかうたがわしい。すくなくとも等高線1m位までは、あきらかに後代の盛土であろうことは、昭和3年の「保存工事書」によつてもあきらかである。²また前方部と後円部の境界もあきらかでなく、現2m等高線をめぐらすと、棺端から約6.5m前後をめぐり、3mでは同じく10.5mとなる。石室について付記すると、石室の基底と前方部の高さが、同レベルである。つぎに注意すべきは、等高線3-4mの弱いステップで、西側ははっきりしないが、東側から南側にかけて断面図のごとく認められる。明証はないが二段築成の可能性が強いようである。比高について、墳頂と背後南側の崖下とは7.5m、墳端とは4.3m、石室前方の平地面とは3mを、それぞれ測る。前方部についてその頂部は前述のごとく公園化され平地となるが、先端の巾は約20m遺存。くびれ部は東側に比較的よく遺存するようである。勾配は地形にそつて前方部にかけて傾斜する。開口によれば、前方部は現況より約1m高かったという。石段最下位と前方部との比高約9mであるが、等高線10m近くで傾斜の変換がある。この地点を前方部の据とも考えられる。つぎに重要なことは、前方部に7段の埴輪の樹立があったという所伝で、大正14年の報文（参考文6）では既に「…と伝へる個所などは著しく形体を損して」として「時々埴輪の破片を見出すにすぎず」と記載する。いまその出土地がどこであるのか残念ながら、あきらがでないがその後、現前方部上端面のレベルを中心に-4~-5mの位置に古墳をめぐって处处に埴輪円筒片が採集されている。以上を整理して、各部の計測値を求むれば表1のごとくなる。古墳構築について、発掘の結果ではないので、確信できないが、丘陵を構成する第3紀層を割断して墳形をととのえたもの

表1 丸岡山古墳計測値

	全 長	後円部径	後円高	くびれ部巾	前方部長	前方部巾	前方部高
現存値	75m ※79.5m	39m ※44.5m	7m	15m	36m	20m	5m

*復原値

で、盛土は少ない。周辺などの施設はない。

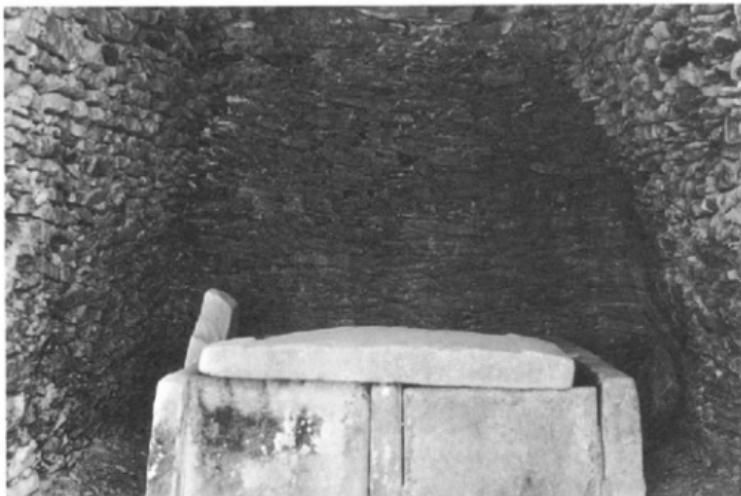
註1 昭和3年（1900年）の写真では石室内部の祠堂の屋根が側壁よりかなり高いことが、参考文9により判明する。

註2 現況では、円丘基底面と石室床面とが同高でかつ前方部とも同高であるが、前2者はかならずしもそうでないとみれる記録もある。即ち参考文6の「石室と石棺とは墳丘後円部の上層に位置し」とする記事で、前2者がただちに同高であるとみるのは論議される。前方部高も後代の変改を併せると再考を要するようである。上記のことは、本墳が通説のように横穴式であったか否かの問題にかかわる。もし円丘裾に開口したとすれば、等高線2mでも側壁北端から5.5mの点に開口する。縄年からこのような長い漢道は考えられず短小の横穴だとすれば、その先は地山を堀り凹めた墓道となろう。その際石室床面の高さにより墓道の傾斜は異なる。しかし開口部が主軸方向と同一であることは横穴であったとしても豊穴的特質を強くもつたものであることを示しているのではないか。

3 石室と石棺 (第3・4・5図)

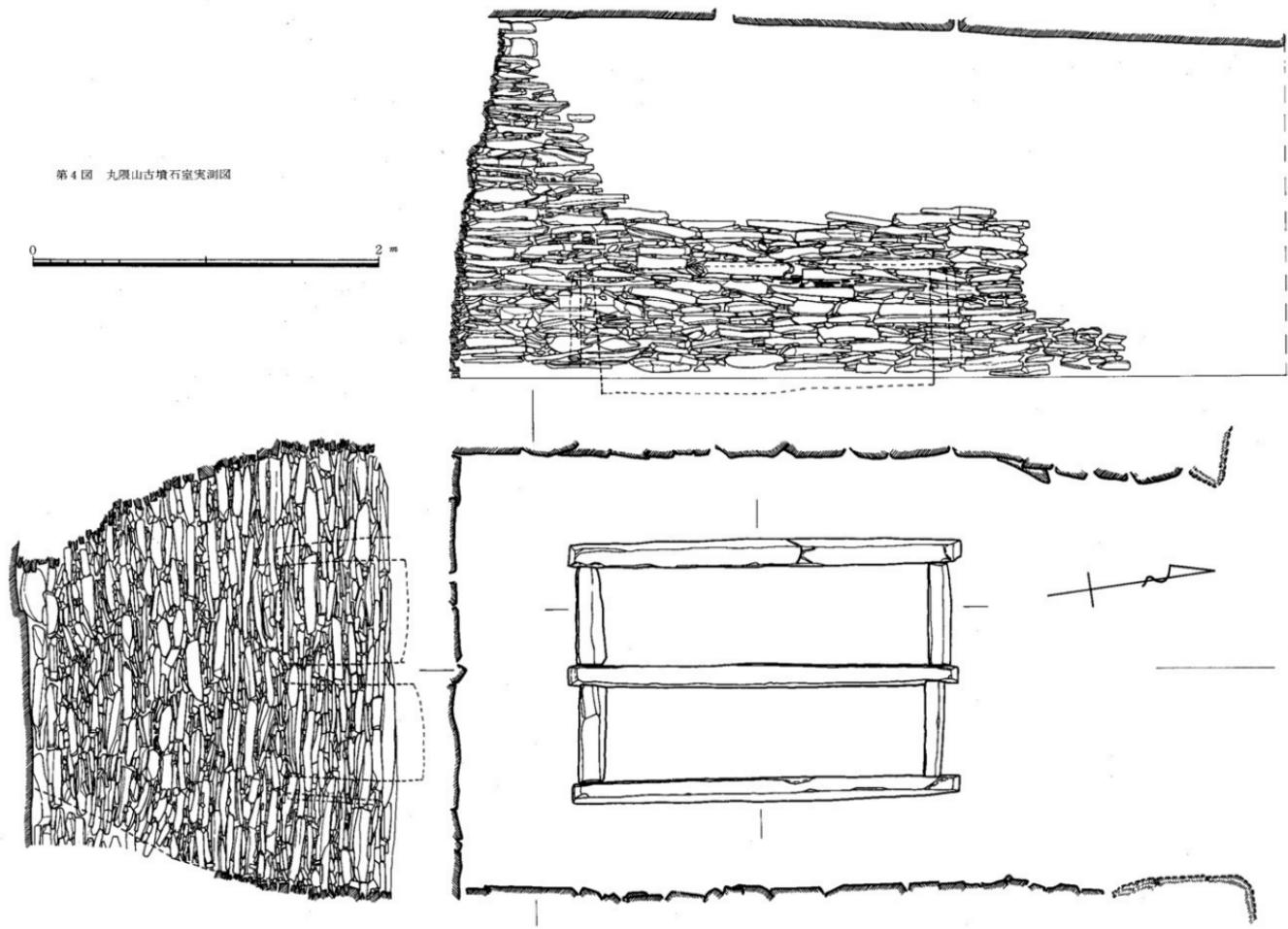
後円部の墳頂に構えられた石室は、古墳の主軸線上にあり、前方部にむかって開口する長方形プランを示している。石室の主軸はN 8°Eとなっては北向きをさしている。

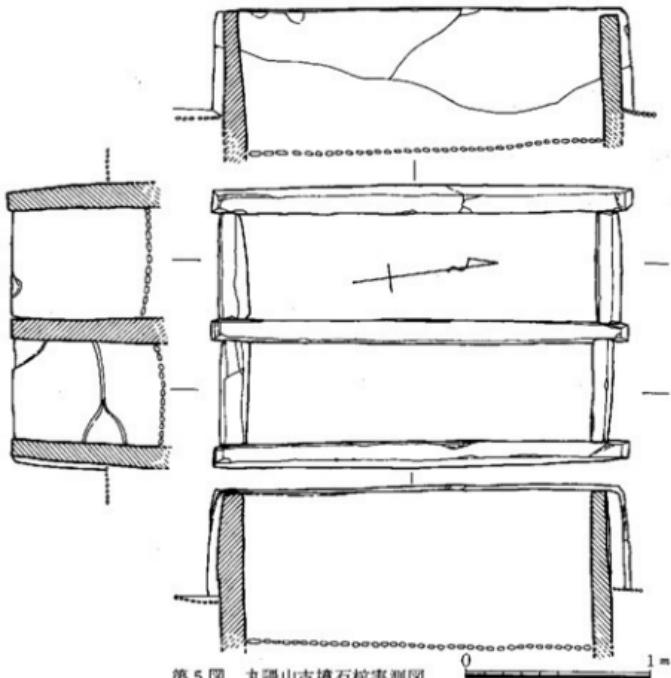
石室は附近に産出する玄武岩の扁平削石を平積みして構築されており、奥壁をのぞく壁面の上半部は崩壊していたのを昭和初年に修理を加え、天井石を構架して現状のように復元されたが、はゞ原状を伝えるものと考えられる。石室は幅2.5m（入口附近では西壁がやゝはり出して2.35m）、奥行現存長3.9m、高さ2.1mである。壁面の構築には長さ40cm、厚み5~10cmの平石をまじえながら、多くはもっと小形の扁平削石を使用している。壁面の交叉するところには両壁にまたがる力石の使用が2、3みられ、3方の壁面を同時に床面から次第に積みあげていった構法がうかゞわれる。壁材は上方にむかうにしたがって徐々に空間をせばめて迫り持たせる技法が採用され、天井では幅1.3mばかりとなる。石室復元前の1928年撮影写真によれば、石室の外側には扁平石のひかえ積みがあった状態がうかゞわれる。石室の壁面及び天井には朱が塗彩されている。入口の構造はすでに1629年の初回発掘に際して破壊されたらしく、現在復元すべき手がかりは失われてしまった。「筑前國統風土記」には「石棺の外に石窟あり。長二間横七尺、高六尺ばかり有。上は大石をおほひ、口も亦石を以て是をふさぐ。」と記されていて、前方部に開口する横口式石室であったことが知られる。石



第3図 石室内写真

第4図 九頭山古墳石室実測図





第5図 九頭山古墳石棺実測図

室の床面は前方部の上面に通じてゐるので、後円部の墳丘を掘開した一種の墓道が設けられて石室と前方部をつないでいたであろうと推察される。

石室内の中央には、中軸線上に硬砂岩製の加工した扁平石を立て、これを共有壁とする2箇の組合式箱形石棺が安置されている。共有壁が正しく石室の中軸線上に立てられていることからも、この2箇の石棺と石室は当初の構築計画の時から密接に計画されたものであったことが知られる。石棺の四壁はいずれも硬砂岩の一枚石を使用しており、厚さ15cmの扁平石に加工され、長壁の小口石と接する部分は若干凹められて組合せ状態を正確にする配慮もうかがわれる。2箇の石棺の内法は長さ1.9m、幅55cmである。蓋石と思われる硬砂岩の扁平材破片6枚が現存しているが、どのように石棺を覆っていたものかは不明である。厚さ10cm一面の外側を高くのこし、内面をやや低く削る手法がみられる。この面はノミ跡がのこり調整もやや粗雑であるから、蓋の内側にあたるのであろう。石棺の内面及び蓋の内側には塗朱のあとがみられる。また石棺が据えられた際の棺内床面は石室の床面よりも20cmばかり深く、石棺内の深さは70cmとなる。

4 出土遺物

現存する副葬品の種類、数量は次のとおりである。

- A. 鏡鑑 2面(「続風土記」には3面とある) 仿製二神二獸鏡 1 仿製六獸鏡 1
- B. 巴形銅器 2個分? (破片3)
- C. 裝身具 勾玉2 管玉7 小玉71
- D. 武器 刀2 剣1 鐵7

いずれも石棺内に副葬されたものであつたらしいが出土状況の詳細は記録されていないので不明である。以下遺物について略解することとする。

仿製二神二獸鏡 直径17.2cm

(第6図・第7図上)

鏡背には紐をめぐらして四等分した内区に脇侍を伴なう神像と疾駆する獸形を交互に配している。神・獸間には乳一個あて配してある。図形は半肉彫りの手法に陽鋳線でかたどっているが細部の表現にいたっては船載品の精巧さに及ばない。やや脱化しているが原型は十分うかうかに足る。地文は唐草化した線文で埋めている。仿製品としては普通の作であろう。図形の外には擬銘帯がめぐらしている。その外にさらに捕虜文帯がみられる。外区は外周が幅1.3cmの素文帯平縁に終り。

その内側は複線波文帯の内外を外行陽起鋸歯文帯がめぐらしている。鏡面に反りがあり、周縁で5mmの反りがみられる。全体黒鏽を呈する。

仿製六獸鏡 直径22.1cm (第7図下・第8図)



第7図 鏡断面図 (I) 二神二獸鏡 (II) 六獸鏡 (1/2大)

第6図
二神二獸鏡

鏡背には内区を乳文で6区に分ち、左旋回する同類

の獸形六箇がめぐらしている。獸形は
半肉彫りに陽鉄線を加え、獸首
には目、鼻も表現されてい
る。地文は唐草文様曲
線で埋められるこ
とは通例のとお
りである。獸文
帶の外側に半円
方形帶がめぐら
ているが、地文
は連珠文で埋め
方形帶内を複線
で四区に分った
中は文字が略され
て珠文に代えられ
ている。外区は櫛齒文帶
菱雲文帶、幅 1.4cm の素

文帶平線に終っている。内区と

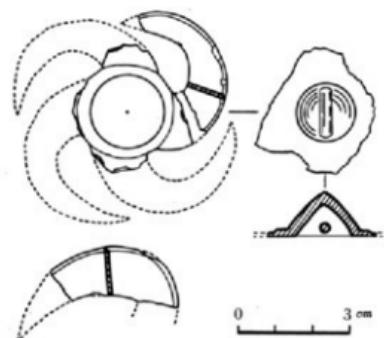
銘帶、銘帶と外区の境界は断面三角

状に高まる櫛齒文帶、外行陽起櫛齒文帶で区分されている。全体に圓形の表現は正確で、原
型鏡の製作をよく踏襲していく、仿製品としても出色の作品である。鏡面の反りは周縁で 6

mm である。全面鍍錫におわれ
て美しい光沢を放っている。神
獸鏡と共に中国三国時代の鏡鑑
を模倣したものであることがう
かくわかる。

巴形銅器（第 9 図）

現存するのは径 2cm、高さ
1.2cm の円錐体中心部と 2 個の
脚片である。本来一個体分であ
ったものか、二個体以上あった
ものか不明である。中心部の円
錐体にはさらに幅 3mm の円座が



第 9 図 巴形銅器復元実測図



第 8 図
六獸鏡

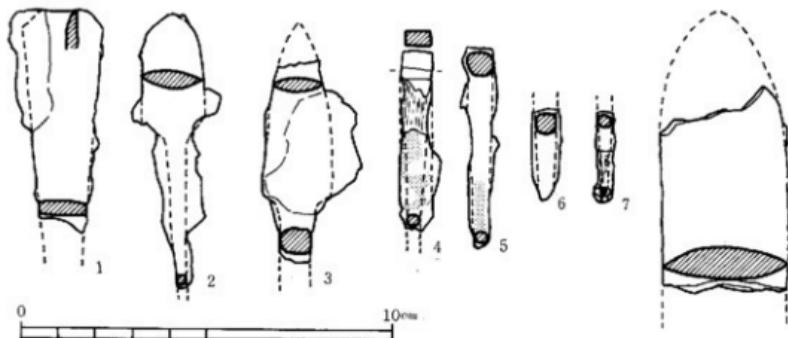
ついており、四脚が付されていた形跡がのこっている。円錐体の内側には径3mmの銅棒が横に鋳造されていて器物にとりつけるための拘着装置と思われる。脚は厚さ1mmで表面の彎曲した外縁には面取りがある。現存する2個の脚は幅、彎曲度などに大小あって同一個体とするよりも、二個体を考えた方がよさそうである。弥生時代には半球形或は截頭円錐形で、九脚、七脚、六脚などがみられ、北九州でも井原鶴溝、唐津市桜馬場などの豪棺出土例が知られているが、古墳時代に下っては本古墳例だけである。九州以外の古墳では山口・岡山・大阪・奈良・三重・岐阜・静岡・群馬などの地域に発見例があり、いずれも円錐形座四脚式の形態である。多くは革櫛の飾金具として使用されたと考えられる。本古墳例は脚が左曲りである点弥生時代のものに通じている。

鉄鏡（第10図1～7）　本来の数量は知りえないが桜皮巻の鍔着した茎4箇（4～7）と三種の鏡頭（1～3）がある。鏡頭はいずれも脇狭く、扁平な作で、先端の平たく広がった斧箭式のもの（1）と、先端の尖った両丸造のもの（2・3）に分けられる。

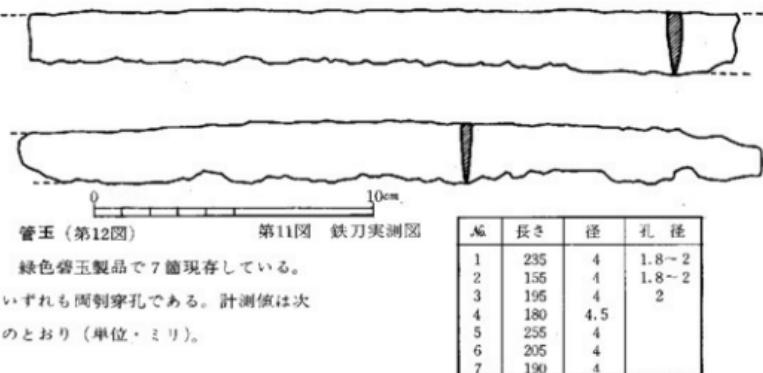
劍（第10図8）　劍身の先端に近い部分の破片1箇がある。身幅4.4cm、厚み9mmの圓丸造である。

刀（第11図）　身幅のせまい刀身片2箇がある。一は身長25.3cm、幅2.2～2cm、厚さ5mm。もう一つは身長26.4cm、幅2cm、厚さ4mmでやや内反りの傾向があるので素環頭太刀の可能性も考えておいてよい。

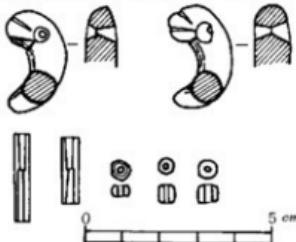
勾玉（第12図）　2箇ある。共に鮮緑色半透明の良質硬玉である。一は長さ2.7cm、厚さ8.5mmで頭にいわゆる3箇の丁字刻みがある。もう一つは長さ2.8cm、厚さ1cmでおなじく頭に3箇の丁字刻みがある。共に穿孔は両割りである。



第10図 鉄鏡（1～7）および鐵劍（8）実測図



小玉 (第12図) ガラス製の小玉71個がある。色調による内分けは水色70箇、藍色1箇となる。一般には厚み、径ともに4 mm、孔径1 mmのものが大部分であるが、なかに4×6.5 mm孔径2 mmのや、大きなもの、また2×4 mm、孔径1 mmの小さなものがみられる。



第12図 玉類実測図

5 出土頭骨片について

残存している1つの大形骨片の大きさは約13cmに12cm位のものである。骨質の保存は非常に良好である。内外両面に丹が附着している。この骨片の頭骨における部位は後頭骨上鱗から右側頭骨部分約1/3と左側頭骨の一部からなる。従って成る程度適合の進行した人字縫合がみられる。骨壁は厚く、外後頭筋節は強く突出している。他に性別を推定すべき根拠となる部分はないので、以上の所見からおそらく男性であろうと思われる。年令も縫合の癒合度から推定せざるを得ないが、熟年には達しているものと思われる。骨の外表は光沢があり、手触りがみられない。

6 おわりに

丸隈山古墳はわが国古墳文化史上、いちはやく大陸から伝來した横口式石室を受容した例として重要な位置づけがなされている。北九州ではこれとならんで佐賀県・横田下古墳が古式の横穴式石室として注目されている。横田下古墳も玄武岩の扁平割石を小口積みし、奥壁と側壁ぞいに各々1つの組合石棺がおかれていた。副葬品には仿製の獸帶鏡、方格規矩文鏡、筒形銅器、短甲、刀、鏃、勾玉、管玉、丸玉、土師器(高杯、甕)が発見された。両古墳の下限を決定するのは巴形銅器、筒形銅器であつて、巴形銅器は弥生時代にもさかのほってみられるが、丸隈山古墳のような円錐形座四脚式のものは4世紀後半をさかのほらない。また二面の仿製

鏡は5世紀代の古墳にみられること、横田下古墳の土師器はいわゆる和泉式の特徴を備えていることなどから両古墳を5世紀前半代から中葉を下らない頃に比定することができる。

次に、丸隈山古墳の石室構造が初期における横穴式石室の形態を示すことはこれまで異論ないが、横口の構造については早く破壊されて察することができなかつた。ところが近時、福岡市・老子古墳第3号石室の発見によって、基本的には竪穴式石室の形態に横口の原初的な閉塞方法を採用し、石室主軸を後円部中央に配し、前方部に墓道を設けて通じる構造が明らかとなつた。これによつて構口方式の採用は5世紀初めにまさかのばることになつたが、さらに丸隈山古墳の失われた横口構造を推察する上に重要な手がかりを提供するものであつた。しかしながら、畿内系の竪穴式石室からだけにこの種石室の系統を考えてよいかという点になるとまだ疑問がのこる。南朝鮮諸地域における横穴式石室出現の契機は4世紀代の楽浪郡の滅亡、高勾麗の南遷にともなう南鮮諸国との交渉という情勢に求められ、墳郭墳との関連を考えようとする見解もある。いずれにせよ横口構造自体は大陸系の要素であつてみれば、内外向系要素の交流の上に成立したことは否定できない。また組合石棺を内部構造にとり入れていることはこの地方に流行した弥生時代以来の根づよい伝統的墓制をも繼承したものというべきであろう。

丸隈山古墳の位置は「魏志倭人伝」にあらわれた伊都國の東北縁にある。弥生時代に栄えた伊都國の中心はこの西南にある怡土平野の中央部にある三晝、井原の地域にあった。古墳時代になると有数の古墳は平野の南奥と丸隈山古墳を含む東北山麓部に形成されるようになった。当時は現在の国鉄筑肥線ぞいの低地は今津湾と船越湾を東西に結ぶいわゆる糸島水道が通じていて志摩地方とは分離していた。このような古代地形の状況下では丸隈山古墳は今津湾に突出した岬状山丘に立地していて、奴国側から伊都國に入る海上の閻門を制する位置を占めていたことになる。古墳の西方周船寺部落内には伊觀神社もあって、このような環境が、後世丸隈山古墳の被葬者をして伊都國主に擬せしめる伝承をすら生むにいたつものと思われる。丸隈山古墳の周辺山麓ぞいには5世紀から6世紀代にわたつて多くの古墳が築造されており、特に6世紀後半代には群小の古墳群が知られている。前方後円墳についてみれば、丸隈山の南、坂氏に2基、東北に2基、東方には近時国指定となつた今宿大塚古墳、さらに東方にも1基を数えることができる。また周船寺地域は博多湾の西南奥にあたつていて、律令時代に下つては大宰府の主船司が設置されたところといわれている。古来、对外出航の一拠点としての性格をも備えていたのであろう。丸隈山古墳の出現した5世紀前半代は、4世紀後半からひきつづいて大和朝廷の朝鮮出兵が行われていた時期であった。北九州沿岸地域の族長達はその最前線にたゞされ、それの運命にあつたのであり、おそらく丸隈山古墳の被葬者も幾度か朝鮮の地を踏んだことであろう。大陸系の新しい墓制をいちはやくとり入れる榮養をになった動機もまたそのあたりにあるのかも知れない。

九隈山古墳関係参考文献目録

1 「周船寺丸隈山古墳関係古記録(復題)」	丸隈氏歴	寛政 8 年写本
2 貝原 益村 「筑前国続風土記」	福岡県史資料統四	1 9 4 4 年
3 八木茂三郎 「九州地方遺跡調査報告」	人類学雑誌第16巻 - 1	1 9 0 0 年
4 長谷部貴人 「所謂「伊祝県七頭骨」に就いて」	人類学雑誌第28巻 - 3	1 9 1 2 年
浜田 繁作 同上 附記	#	"
5 富岡 謙造 「古鏡の研究」		1 9 2 0 年
6 島田寅次郎 「丸隈山古墳」	福岡県文化財調査報告第1編	1 9 2 5 年
7 後藤 守一 「漢式鏡」	日本考古学大系第1巻	1 9 2 6 年
8 烏田寅次郎 「丸隈山古墳を概観して同時代前後に於ける本県内の主なる古墳に及ぶ」	筑紫史談38	1 9 2 6 年
9 島田寅次郎 「丸隈山古墳の保存工事」	福岡県文化財調査報告第3編	1 9 2 8 年
10 後藤守一編 「古鏡叢葉」(上)		1 9 4 2 年
11 森本 六爾 「巴形鏡器考」	日本考古学研究所収	1 9 4 3 年
12 森 貞次郎 「北九州古墳の編年的考察」	西日本史学	1 9 4 9 年
13 九州考古学会編 「北九州古文化図鑑」第2編		1 9 5 0 年
14 楠口 隆康 「九州古墳墓の性格」	史林38の3	1 9 5 5 年
15 楠口 隆康 「九州」	日本考古学講座5古墳文化所収	1 9 5 5 年
16 水野清一・小林行雄編 「國解考古学辞典」		1 9 5 9 年
17 周船寺村誌編集委員会「周船寺村誌」		1 9 6 1 年
18 小林行雄 「中期古墳文化の伝播」	古墳時代の研究所収	1 9 6 1 年
19 日本考古学協会編 「日本考古学辞典」		1 9 6 2 年
20 森 貞次郎 「丸隈山古墳」	古墳めぐり(2)西鉄ニュース	1 9 6 5 年
21 白石太一郎 「日本における横穴式石室の系譜—横穴式石室の受容に関する一考察—」先史学研究5		1 9 6 5 年
22 小田富士雄 「九州」	日本の考古学IV古墳時代(上)	1 9 6 6 年
23 小田富士雄 「横穴式石室における複室構造の形成」	史蹟 100号	1 9 6 8 年
24 森 貞次郎 「竹原古墳」	中央公論美術出版	1 9 6 8 年
25 原田 大六 「伊都國土基盤」(国緯)		1 9 6 9 年
26 福岡市役所編 「福岡」(市制施行80周年記念誌)		1 9 6 9 年
27 福岡市教育委員会編 「福岡市とその周辺の文化財」		1 9 6 9 年
28 森 貞次郎 「裴御古墳の発生まで」	古代の日本3 九州	1 9 7 0 年

凡　例

1. 本報告は福岡市内の重要な文化財の保護、育成並びに文化財の理解を一層深めるために作られたものである。
2. 本報告書作製にあたって筑紫豊、岡崎敬、森貞次郎の諸先生方の指導と九州大学文学部考古学研究室の協力を得た。又調査に当たって丸隈山古墳保存会会長富永悦太郎氏や周船寺公民館長篠田重介氏をはじめ地元各位にひと方ならぬお世話を得たことをここに記して感謝の意を表す。
3. 本稿は1は下条信行、2は三島格、3・4・6は小田富士雄、5は永井昌文の執筆にかかるもので、編集は下条が担当した。遺構遺物の実測にあたって、下記の方々の協力を得た。記して謝意を表する。前川威洋、柳田純孝、橋口達也、高倉洋彩、西健一郎、貞方敏、岩崎二郎



福岡市埋蔵文化財調査報告書 第10集

福岡市丸隈山古墳／発行 昭和45年5月／編集 福岡市教育委員会／印刷 川島弘文社

文化課
藏

写真は出土勾玉

中華人民共和國海關總署印

關稅司印

正 稅 索

正 稅 索

1928年1月1日 (1928)

船 舶 故 品 稅 索 品

1928年1月1日 (1928)

船 舶 故 品 稅 索 品